

2. 小児てんかんの成因及び予後に関する研究

研究協力者 合屋 長英 (九州大小児科)

協同研究者 黒川 徹

花井 敏男

I シルビウス発作の予後

<目的>

Rolando 領域に発作波を有する小児のてんかんは思春期以後は発作が消失し、予後良好といわれている。しかし乍らこれらの患者を実際にみていると薬物療法に抵抗を示すものがあり、同じく予後良好とされる小発作に比し薬物に対する速かな反応を得難い。また昭和50年に行ったわれわれの調査では予後追跡期間が短いこともあって、発作消失率は56%、脳波上の発作波消失は37%に過ぎなかった。従って今回予後の再調査を行なった。

<対象>

1回以上脳波上Rolando 領域に発作波を示し、臨床上面面を中心とした部分性発作と呈した37例である。

<結果>

(1) 服薬継続群は13例(35.1%)、服薬中止群は9例(24.3%)、減量開始群5例(13.5%)、服薬不明10例(27.1%)であった。

(2) 以上4群について比較すると発病年齢は5~9才、平均6才であったが、これら4群間に差はなかった(表1)。

(3) 発作持続期間は服薬中止群でもっとも短かく平均1.5年であった。発作が1回のみのももの3例あったが多くは3カ月~7年4カ月であった(表2)。

(4) 最終発作年齢は服薬中止群平均10才4カ月、減量開始群平均9才11カ月で、両群では多くは7才~11才8カ月であった(表3)。

(5) 発作消失率は10~14才では60%、15才以上では88%であった(表4)。

(6) 脳波は正常化13例、境界となったもの5例、基礎波異常7例、棘波4例、Rolando 領域発作波5例であった。すなわち正常化は得られ難いが棘波、Rolando 領域発作は多くは消失した。ことに15才以上では11例中棘波は2例(うちRolando 発作波1例)に残っているに過ぎなかった。

<結論>

シルビウス発作は予後良好であり15才以後では発作は88%に、脳波上発作波は82%に消失した。

II てんかん外来患者の通院期間

1978年われわれは小児てんかんの長期予後について報告した。それによると服薬中止のできた群は多くは3~5年間発作が出現し、発作は消失しているが服薬を継続している群では5~8年、発作がなお持続し服薬も継続している群では10~15年以上発作が続くことを見出した。今回はこれらの患者の外来通院期間について調べたので報告する。

まず発作型別にみると大発作では予後において発作があり服薬継続中のものは56例、発作が1年

以上なく服薬は継続しているものは25例、発作もなく服薬も中止しているものは129例であった。これらの3群について通院期間をみると発作持続、服薬継続群は56例中22例40%が10年以上通院し、13例23%が1年以下、2～3年が11例約20%であった。発作消失、服薬継続群では25例中13例52%が10年以上であった。一方発作消失、服薬中止群では129例中54例42%が1年以下、39例30%が2～3年であり、計72%が3年以下であった。小発作は13例中2例が発作が止まっていなかったがこれらは3年以下しか通って来ていない。服薬中止群8例中5例が3年以下の通院であった。なお小発作は女兒に多いためか発作が消失していても長期間通院してくる傾向がみられた。點頭てんかんで発症し現在も発作が続いている6例中4例は10年以上通院していた。一側性発作では発作継続群7例中3例は1年以下、4例は10年以上に分かれた。発作消失、服薬中止群では全例6年以下であった。シルビユス発作は全例服薬を中止しており、6年以下の通院であった。多型性発作で発作持続群は10年以上が14例78%を占めたが残り4例22%は3年以下で両極に分かれた。

死亡例について通院期間をみると発作型の如何を問わず概して通院期間が短かく、1年以下は32例中17例53%を占め、また32中31例97%が6年以内の通院であった。すなわち死亡例は発病後比較的早期に死亡することが推定された。

これらの全群についてまとめてみると、九大小児科初診後10年以上を経た408例中、138例33.8%が1年以下、25.2%が10年以上であり、ついで22.1%が2～3年、14.7%が4～6年、4.2%が7～9年であった。現在もなお発作があるものでは10年以上47.0%と1年以下25.0%が多く、発作があるにも拘わらず大学病院へ受診して来ない群と、10年以上通っているが発作が止まらない群に分かれた。発作は消失しているが服薬を続けている群では10年以上通院が61.7%を占めた。この群では一たん服薬中止後再発し、その後服薬から脱却できないものや漫然と服用しているもの(再発を恐れて)が含まれる。発作が消失し、服薬も中止しているものは216例中約40%が1年以下、27%が2～3年、20%が4～6年であり、計80%が6年以下であった。

3. 熱性痙攣の成因ならびに予後に関する研究

研究協力者 梶谷 喬 (川崎医大小児科)

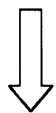
協同研究者 上岡 清隆

I 熱性痙攣患者の追跡調査(第2報)

熱性痙攣は小児期の痙攣性疾患のなかでは最も頻度の高いものであるが、その予後については必ずしも意見の統一をみていない。

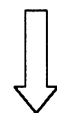
私達は熱性痙攣患児の追跡調査を岡山市の3才児健診例316例(調査時年齢6才8カ月から7才7カ月)、および当科の例263例(調査時年齢7才から22才、平均10才)について行ない、次の結果を得た。

(1) 3才児健診例では、熱性痙攣のみを示した例が99.4%を占め、てんかんに移行した例は1例(0.3%)、死亡1例(0.3%)であり、当科の例では、熱性痙攣のみを示した例が97%、てんか



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



<目的>

Rolando領域に発作波を有する小児のてんかんは思春期以後は発作が消失し、予後良好といわれている。しかし乍らこれらの患者を実際にみていると薬物療法に抵抗を示すものがあり、同じく予後良好とされる小発作に比し薬物に対する速かな反応を得難い。また昭和 50 年に行ったわれわれの調査では予後追跡期間が短いこともあって、発作消失率は 56%、脳波上の発作波消失は 37%に過ぎなかった。従って今回予後の再調査を行なった。